

頌栄短大植物標本コレクション ～そんなに集めてどうするの～

期間：令和2年8月1日（土）
～ 9月13日（日）
会場：兵庫県立人と自然の博物館
4階ひとはくサロン周辺

頌栄短大植物標本コレクションとは？

頌栄短期大学（頌栄短大）植物標本コレクションは、約25万点の植物さく葉標本からなる一大コレクションです。頌栄短大は創立130年を超える日本の保育系短期大学の草分け的存在で、所属教員だった松村義敏氏、その後任である福岡誠行氏、黒崎史平氏らにより植物標本庫がつくられ、拡充されてきました。関西の3大植物標本庫として京都大学、大阪市立自然史博物館と並び称され、収蔵標本は多くの植物分類学関係の論文に引用されています。後発のひとはくに少ない1920-90年代の兵庫県産標本、現在では入手困難な松村氏が戦前に樺太で採集した標本、各地の植物標本庫との標本交換により入手した絶滅植物の標本等、数多くの貴重な標本があり、環境省や兵庫県、県下の市町版レッドリスト策定の際にも多くの標本が利用されてきました。そうした経緯から、福岡・黒崎両氏の退職後の2012年、頌栄短大植物標本コレクションはひとはくに寄贈されました。

植物標本とは？

「植物標本」と聞いて皆さんは何を思い浮かべるでしょう。茶色い押し花でしょうか。そんな



写真1
エゾミンハギ
兵庫県には分布しないと考えられていましたが、近年淡路島から発見され、その後但馬地方でも分布が確認されました。

もん、いっぱい集めて後生大事に置いておくって一体どういうこと?と思われるかもしれません。押し花と標本を分ける決定的な違いは「ラベル」です。植物標本には、乾燥させた植物の他に、それを誰が、いつ、どこで採集したのかを記すラベルがついています。標本はその植物がある時、ある場所に存在したことを示す実物付きの証拠データなのです。実物ですから、正誤を後々検証することができます。また、標本の採集情報から産地の環境を推し量ることもできます。逆にラベルがなければ、どんなにきれいな押し花であったとしても、学術標本としての価値はありません。博物館には市民の方々やマスコミ、行政関係者から数多くの質問や同定依頼が寄せられますが、それらに迅速に確度を持ったお答えを返すためにも日頃の標本整理は欠かせま



写真2
ヒメタツナミノウ
アイソタイプ（副基準標本）。
ホロタイプ（正基準標本）
は東京大学に所蔵されています。



標本ラベル
標本台紙に植物と一緒に貼られる、採集データです。植物名（ないこともあります）、「誰が」「いつ」「どこで」採集したかを書きます。人によってはどのような環境に生えていたか、花や実の色、採集者番号（写真では右下の85-479）を付していることもあります。

せん。今回の企画展では、標本を多く集めてわかることを直感的に理解できるよう、展示を工夫しています。

そんなに集めてどうするの？

標本を多く集めて分かることは様々あります。例えば、植物は環境によって大きく姿を変えます。有名なブナ (*Fagus crenata*) の葉形変異の例を挙げましょう。ブナは北海道南部から九州南部に生育しており、北へ行くほど、また日本海側ほど葉のサイズが大きくなることが知られています。この説を検証するなら日本を北から南にブナを調べて回る必要がありますが、お金も時間もかかります。しかし、各地から採集されたブナの標本が博物館にあれば、標本を調べるだけで検証が可能です。標本が集積していることで、研究時間やコストの削減が可能になるのです。

また、絶滅危惧種の抽出や判定にも使えます。博物館の植物収蔵庫で標本棚を片端から見ると、たくさん標本がある植物と数枚しかない植物があることが分かります。標本の点数は、どのくらい簡単にその植物と出会うことが出来るかという目安になります。絶滅危惧種と呼ば



写真3
トサオトギリ
牧野富太郎によって高知で採集され、トサオトギリの名が付けました。近年播磨地方の数か所で発見されました。高知県では現状不明で、現在生育が知られているのは兵庫県だけです。

れる植物は、標本庫に標本が少ない植物と比べてあながち間違いではありません。採集場所もごく限られています（中にはありふれていて逆に採集されず、標本が少ないという植物もありますが）。

標本が沢山あれば大丈夫というわけではありません。標本をよく観ていくと、採集年代の古い標本ばかりで最近採集された標本が1枚もないことがあります。過去の採集地を調べに行くと既に絶滅しており、絶滅危惧種の仲間に入ったということもあります。過去から蓄積された標本があつて初めて、現在起こっている自然環境の変化を捉えることができます。今、身の回りに普通にある植物が、将来どんな運命をたどるかは誰にも分かりません。今後も標本の計画的、かつ継続的な収集と保管が望まれます。

ひとはくでは開館30周年を迎える2022年の完成を目指して、植物標本庫と展示ギャラリーを併設したコレクションナリウム建設を進めています。100年後の人たちが今ある標本にアクセスできるよう、しっかりと標本を保管し展示できる施設にする予定です。ぜひご期待ください。

高野 温子 （自然・環境評価研究部）



写真4
タカノホシクサ
日本から絶滅した植物。群馬県のただ1か所の池で発見され記載されましたが、1960年代に姿を消しました。